

第6回「共に生きる社会」めざして 高校生作文コンテスト ベトナム医療福祉体験ツアー レポート

昨年実施した「第6回『共に生きる社会』めざして高校生作文コンテスト」において、最優秀賞、優秀賞、佳作を受賞した5名が、副賞の「ベトナム医療福祉体験ツアー」に参加し、ホーチミン市を訪れました。参加者は現地の医療福祉の実情を垣間見るとともに、さまざまな文化や習慣に触れるなど、多くの貴重な体験をしました。



【日程】 2016年3月27日（日）～4月1日（金）

【主な訪問先】 国立チョーライ病院、JICA 南部事務所、在ホーチミン日本国総領事館、身体障害児童施設、ホーチミン市内・郊外視察（メコンデルタ、クチトンネル、サイゴン大聖堂、戦争証跡博物館、統一会堂、ベントイン市場 等）

青木 綾香（千葉県・千葉敬愛高等学校 3年）

この研修に参加した6日間で、私は日本と海外の繋がりの大切さや素晴らしさを改めて感じることができました。

2日目、3日目に訪問したチョーライ病院では、日本の病院では考えられないような光景が広がっていました。大勢の人であふれ返る病院の敷地内、手術室前に無造作に置かれたストレッチャーの上で自分の番が来るのを待つ何名もの患者さんなど、見た限りとても整っているとは言えない環境でした。その一方で、ところどころに日本でも使われるような最先端の技術を持つ機械も見受けられ、その多くは日本の支援によるものだと教えていただきました。他にも、理学療法士や作業療法士が活躍していたリハビリテーション室では、かなり



以前から使われているという日本製のリハビリ器具で、実際にリハビリに励む患者さんを目の当たりにすることもできました。私はこういった光景から、日本がベトナムの医療に少しでも貢献できていることが実感でき、とても光栄に思いました。

私が病院研修で一番感銘を受けたのは、海外青年協力隊としてチョーライ病院で働く日本人の言語聴覚士の方のお話です。言語を中心に扱う職業にもかかわらず、海外に目を向け、実際に言葉も文化も全く違う国で働くことがどれだけ大変で勇気のいることなのか、今のままの私では同じような道をたどることは難しいと思知らされました。同時に、将来言語聴覚士として海外で働きたいという夢を諦めかけていた私に希望をくれるようなお話でした。

病院だけではなく日本国総領事館や JICA にも訪問させていただき、ベトナムを支える側から見たベトナムの現状についてのお話を伺いました。そこで学んだことは、日本も多くの支援を外国から受けているということです。私たちが日頃日本で手にしている商品の多くは日本国内だけでつくられたものではなく、原料や労働力を外国が与えてくれたおかげで出来上がったものであり、諸外国との支え合いは必要不可欠だと感じました。

障がい児施設では実際に子供達と接する機会があり、障がいを持っているにもかかわらず心からの笑顔を見せてくれた子供達から、生きる活力を分けてもらえたような気がしました。それと同時に、子供達がこの先も笑顔でいられ

るように、日本で自分ができることは何なのかを改めて考えるきっかけをもらいました。

ベトナムに行って一番大きく感じたことは、ベトナムの方々から日本を心から好きでいてくれているということです。日本語で話しかけてくれる方も多く、思いやりを持って接してくれる方がほとんどでした。また、今回の研修全体で気づいたことは「医療は思い」ということです。自分には無理だと思うことでも、「誰かの役に立ちたい」という思いがあれば、誰にでも誰かを支えることができるということを学びました、これからは様々な面で海外に目を向け、人の心に寄り添えるような人になれるように努力していきたいと思えます。

櫛引 潤菜（栃木県・宇都宮文星女子高等学校 2年）

今回はベトナム・ホーチミン医療福祉体験ツアーに参加させていただき、本当に有難うございました。初めての海外、最初は不安がいっぱいで、一緒に行く他の受賞者の皆とも面識がなくて大丈夫だろうかと思っていましたが、参加者はともフレンドリーですぐに打ち解けることができました。

ベトナムに到着したのは夜 11 時ごろでした。空港に着いた瞬間に生暖かい空気が流れてきて、すぐに日本との気温の違いを感じることができました。空港の標識や看板にはまったく日本語がなく、周りの人達が話しているのは初めて生で耳にするベトナム語。あの不思議な感覚はきっと一生忘れられないと思えます。ベトナムには列車が少なく、主な交通手段はバイクだということで、夜 11 時を回っていてもバイクに 2 人、3 人乗りをしていてとても驚きました。日本の多くの街では夜 11 時には街灯も薄れ静寂に包まれますが、ベトナムは真逆とっていい位に賑やかで明るく、ベトナム人の陽気さが伝わってきました。中でもベトナムの南側にあるホーチミンシティの人々は陽気でのんびり屋が多いようですが、初めて来た私たちにもそれはすぐに感じ取れるものでした。



ベトナム研修での 6 日間の中で、私の心を動かした出来事があります。それは 3 日目の障がい児童施設見学です。その施設には生まれたての赤ちゃんから 5 歳までの子供たちがいて、何らかの障がいを持っている子や、中には親を失ってしまった孤児もいました。私たちは 20 分交代で新生児から 2 歳の教室、3 歳から 5 歳の教室を見学しました。教室の中は日本の保育園と変わらずテレビで音楽がかかっていたり、床には子供たちが遊べるようにレゴブロックなどが置いてあったりしました。私たちが見学したのは午後 2 時半ごろだったので寝ている子もいましたが、多くの子は起きていました。子供たちは自分から近寄ってきてくれて、膝の上に座りすごくきらきらした笑顔を見せてくれました。私は子供たちの温かさに思わず涙が出そうでした。孤児の子供たちはかけがえのない「親」という大きな存在を失っているにもかかわらず、まぶしいくらい笑顔で、そしてとても幸せそうに笑うのです。この笑顔に心を打たれて、また 1 つやりたいことができました。それは日本各地の孤児院を訪問し、ボランティアをすることです。生きていることの素晴らしさや、これから先今までよりずっと楽しいことが待っていることを伝え、子供たちと幸せを共有して、心から「生まれてきてよかった」と思っしてほしいのです。

この研修で学んだことは、人の温かさです。言語が異なるために通じず、また全く面識がなくとも、温かく人を迎えてくれる心の大きさにとても感動し、私もそのような心の持ち主になりたいと思えました。この研修は私の大きな財産となり、今後に生かせる大きな糧となりました。このような素晴らしいツアーに参加させていただき、心から感謝しています。

この研修で学んだことは、人の温かさです。言語が異なるために通じず、また全く面識がなくとも、温かく人を迎えてくれる心の大きさにとても感動し、私もそのような心の持ち主になりたいと思えました。この研修は私の大きな財産となり、今後に生かせる大きな糧となりました。このような素晴らしいツアーに参加させていただき、心から感謝しています。

伴田 琴美（新潟県立村上高等学校 2年）

今回のベトナム研修は、海外の医療や文化に間近に触れることができ、日本がいかにか恵まれているのかを実感することができた、とても良い経験となりました。

約6時間の長いフライトを終え、私達はベトナムに到着しました。飛行機を降りた瞬間、体をモヤッとした暑くて湿った空気が包み込みました。とても新鮮な感覚に、待ちに待った研修がようやくスタートするのだという思いが湧いてきました。

空港からホテルまでの道のり、私は窓の外から一切目を離すことができませんでした。目を疑うようなものすごい数のバイクや、鳴り止まない車のクラクション。多くの道路は標識が設置されておらず、また信号を守る人もほとんどなく、歩道を車やバイクが走っているところも見られました。

どれだけ交通整備が十分にされていないかが、街の状況に表れていました。特に人口が集中しているこのホーチミン市では、日常的にこのような渋滞が起きているそうです。初めてこの国を訪れた私にとって、ここは交通ルール無法地帯のように思え、強い恐れを感じました。乗り物どうしの距離はわずか数センチしかなく、いつか衝突してしまうのではと心配になりました。

研修の2日目と3日目は、チョーライ病院を訪問しました。ローカルの病院としては、一番信頼できる総合病院とされているとても大きな病院ですが、病床数に比べて圧倒的に入院患者が多いため、廊下にまで患者さんが溢れている状況でした。30度以上の暑さの中、床に布を敷き、そこで寝て診察を待つ人や、ほぼ布一枚の格好でストレッチャーに横になり、自分の手術の順番を待っている患者さんもいました。また、1台のベッドに2人の患者さんが寝ているところもありました。日本の病院では、冷暖房をはじめとする施設や整備が整い、また衛生管理を徹底していて、患者さんの病状が悪化するような負担をかけるようなことはありません。ベトナムで一番信頼できると評価されるこの病院ですら、私が知っている日本の医療との大きな格差と驚きの現実に、たくさんの課題があるのだと分かりました。

私は日本、そして自分自身がいかにか恵まれているかを改めて実感し、感謝しています。このような素晴らしい機会を与えてくださり、本当にありがとうございました。この研修を通し多くの人と出会えたこと、そして各地から集まり一緒に研修に参加させていただいた同年代の人達と共に学び、素晴らしい経験をすることができ、友情も芽生えたことは私にとって一生の宝物です。本当に、ありがとうございました。



杉本 理紗（神奈川県・洗足学園高等学校 1年）

医療福祉体験ツアーに行く前は、どんな国なのかイメージを持っていなかったベトナム。水に気をつけなさい、スリに気をつけなさい、と両親に言われながら出発した今回の研修でした。最初は不安も多かったのですが、とても楽しく刺激の多い経験をたくさんでき、もう一度訪れたいと思いつつ帰国しました。

ベトナムに到着して最初に驚いたのが交通状態です。信号は少なく、乗用車よりバイクの数が圧倒的に多く驚きました。バイクが車と車の僅かなスペースを通り抜けて走っていく風景や鳴り止まないクラクション、2人乗り、4人乗りを



しているバイクなど、いつか交通事故を目撃してしまうのではないかと思います。ガイドさんによるとバイクが多いのは、安く速く移動できることに加え、列車などの公共交通が整っていないためとのこと。

研修の2日目と3日目にチョーライ病院を見学して、日本の病院とは大きな違いがあることを学びました。最も強く感じたのは衛生面で、病院なのに地面に寝ている人やステント手術を待つ患者を乗せたストレッチャーが廊下に並べられているなど、「これは大丈夫なのか」と考えてしまう場面が多くありました。日本総領事館のスタッフは、ベトナムの医療水準が低いことに対し、技術ではなくその手術のアフターケアや殺菌などが問題であると訴えていました。ただ、こういう理由で先進国より医療水準が低いと言われ、日本では軽傷とされる状態がベトナムでは重傷になりかねないとなると、悲しく不満に思い、今後このような不公平さが改善されていくことを願います。

また、病院の正門をくぐると、両側に銅色のプレートが設置されていました。それらは1970年代からの日本政府とJICAのチョーライ病院との友好関係を示していました。さらに、日本が寄付した機械を見たり、JICAの派遣員にも会うことができたりと、日本の援助活動をとっても身近に感じることができました。病院での活動だけでなく、地下鉄や橋の建設も日本が援助してきたと聞き、今まで日本に住んでいては知らなかった援助をじかに見ることができたことに感動しました。

研修全体を通して一番身にしみたのはベトナム人の優しさ、また笑顔の大切さです。病院での見学や障害児施設で子供と触れ合っている際、観光する最中も言葉が通じず困ることがありました。それでもベトナムの皆さんは、手を振ってくれたり、日本語や英語を少しづつ交えて丁寧に伝えようとしてくれたりしました。一方、私が大きな笑顔で接し、また相手の会話を理解しようとする姿勢を見せることで、子供たちは楽しそうに笑ってくれ、通訳にかかるタイムギャップがあっても理解しあうことができましたと思います。話す言葉が違っても、伝えることはできることを学びました。他のメンバーとも6日間、いっぱい笑って楽しい時間を過ごし、時には真剣に意見を交換し、今回初めて会ったとは思えないくらい仲良くなることができました。

将来国際的な医療の現場で働きたい、この夢は前から持っていましたが、この研修を通じてその思いはとて強くまりました。医療は各国の経済状況が違うだけで、とても大きな差異が生じることを実感しました。また、笑顔と優しさは世界共通だということも強く実感しました。この経験を生かして、日本国内でもボランティア活動に参加し、また勉強も頑張ろうと思います。これから世界の医療の現状についてもっと学び、将来医療を通して笑顔を送る一員になりたいです。今回の経験は、私の国際医療の夢への素晴らしいキックスタートになりました。

平澤 怜奈（岐阜県立飛騨高山高等学校 1年）

私は、今回のベトナム研修で多くのことを学ぶことができました。特に3つのことが心に残っています。

1つ目はチョーライ病院です。チョーライ病院はベトナムで一番大きい病院ということで、事故や病気、怪我などで毎日多くの方が訪れています。施設には入院患者さんも多くいましたが、ベッド数が不足しているとのことでした。昔は2人で同じベッドを使うこともあったらしく、日本では考えられないことだったのでとても驚きました。また、医療器具は日本からの寄付という形で約20台の精密機械がありましたが、部屋の設備が整っておらず、あまり使えていない器具もありました。最後に手術の様子を見せていただきましたが、本来ならば絶対に見ることのできない場面なので、とても強く印象に残っています。次の患者さんが待っている姿が見えている中、焦らず丁寧に、そして素早く手術しているドクターを見て「命との戦い」を見た気がしました。

2つ目は障害児施設です。私たちは保育園児くらいの子と触れ合いました。



た。その子たちのほとんどは孤児で、生まれてすぐに親に捨てられた子もいました。その子たちの説明を通訳してくれたガイドさんも「あなた達はとても恵まれていることを知ってほしい。」と涙を流していたのが頭から離れません。そんな子たちと遊んでいると、とても人懐っこく、笑顔で近づいてきて膝の上に座ってくれる子もおり、「こんなかわいらしい子を捨てたの!？」と返事の返ってこない質問を頭の中で繰り返していました。世界には孤児がたくさんいて、私にも何かできないかと考えるようになりました。

最後は、クチトンネルでの経験とビデオについてです。クチはホーチミンの北に位置し、ベトナム戦争被害がひどかった地域の1つです。クチの人々は侵略されまいと様々な知恵を絞り、何事にも屈しない強靱な精神で敵を迎え撃っていました。女性も活躍しており、戦士だけでなく民間人にも死者はほとんどいませんでした。それは自分たちで掘ったトンネルがあったからです。中は狭く、明かりもないけれど、その中でクチの人々はベトナム戦争を切り抜けたそうです。罅や入口なども見えにくくなっており、本当にすごい人たちだなと感心しました。実際に銃の試し打ちができるコーナーもありましたが、音を聞いて、あれで人を殺していたと考えたら恐くなってきました。

今まで私は医療についてあまり興味はありませんでした。しかし、病院と孤児院で自分の中の「気持ち」に変化がありました。「少しでも病気の人の役に立ちたい。」「親に捨てられた悲しみを少しでも埋めてあげたい。」この研修で実際に目で見て体感したことで、自分の将来と医療との関わりを考えるようになりました。研修に参加して本当に良かったです。そして、関係してくださった人々に感謝の気持ちでいっぱいです。自分にもできることを探しながら、「これからの人生で少しでも人に幸福をあげられる人になりたい。」と、研修を通して固まった私の決意です。

※ 学校・学年はツアー参加当時のもの



医療福祉の多彩なエキスパートを育てる。

国際医療福祉大学